

学 位 論 文 題 名

北海道における旧日本建築家協会所属の
建築家に関する研究

学位論文内容の要旨

我が国における建築家研究は、首都圏や関西圏の都市を本拠とした人物を中心に行われてきた。村松貞次郎は『日本建築家山脈』(1965 年)において、「群として扱えなかった建築家」として、地方都市を本拠とした建築家の存在を認め、また西澤泰彦は「日本近代建築史の総体的把握」の為に、地方での建築活動の解明が不可欠であるとしている。近年、地方都市を本拠とした建築家の研究は散見されるものの、資料の欠如などを要因として、依然として研究の蓄積が少ないのが現状である。

北海道では、角幸博らの研究により、戦前の建築家としてマックス・ヒンデルや田上義也らの活動が知られている。戦後は、1948 年に北海道大学に建築工学科が設置され、建築の高等教育が始まって以降、太田實をはじめとする教官の活動が注目を集めた。1970 年代は、彼らに教育を受けた所謂アトリエ系事務所の設立・活動が活発となり、また 1975 年の北海道建築賞設立、1981 年の北海道建築作品発表会開始も相まって、北海道建築界は興隆を見せた。従来、両者に挟まれた戦中から戦後の 1940 年代から 1960 年代に、北海道の都市を本拠として活動した建築家について、その前後と比べ、経歴や活動の内容が明らかではない点が多く見られた。

本論は、戦後 1950 年代から 1960 年代にかけて、自ら設計事務所を設立し、北海道の都市を本拠として活動した建築家の、経歴と活動を明らかにすることを目的としている。対象とする建築家は、1967 年時点で旧日本建築家協会に所属し、北海道の都市を本拠とし、自ら設計事務所を設立した 6 名―田上義也、栄米治、岡田鴻記、吉田三郎平、橋本理助、岩見田良夫―としている。ここに挙げた人物は、従来断片的に経歴や活動が知られるのみであったが、本論において初めて体系化し、各人の建築家像を明示するとともに、同世代 6 名の人物の比較と位置づけを試みている。

本論文は序章以下、9 章で構成される。

序章では研究の目的、方法などの他、我が国における建築家研究の動向と、地方都市を本拠とした建築家の経歴と活動について概観した。

第 1 章では建築設計関連団体について、戦前と戦後、全国組織と北海道に分け各団体の概要を説明した。その上で 6 名は、旧日本建築家協会北海道支部の設立に際し中心的役割を果たした点と、他の団体の要職を務め、団体を超えて建築設計業で主導的な立場にあった点を指摘した。

第 2 章では、6 名の北海道建築界における位置づけを行うにあたり、戦前から戦後、概ね 1920 年代から 1970 年代にかけての北海道建築界について、5 つの群の建築設計組織と設計者を中心に通観した。

以下、第 3 章から第 8 章までは、6 名の人物について各人の経歴と建築活動を示した上で、その特徴を考察した。特に建築活動に関して、優れた意匠等による建築を中心とした評価に留まらず、戦後の多産な活動を把握するため、設計した施設の件数を基に分析を行い、各人の建築設計関連団体における役割を論じた。

第 3 章では田上義也 (1899～1991) の経歴と戦後の建築活動を示した。ユースホステルの設計に

において、田上がユースホステル運動の理念と、田上の設計姿勢を体現した意匠であることを明らかにした。北海道銀行店舗の設計では、北海道銀行初代頭取の島本融との交友により設計件数が多かった点、建築意匠に都市への意識が見られる点、島本と議論を重ねながら設計した店舗が存在する点を指摘した。

第4章では栄米治(1904～1976)の経歴と建築活動を示した。栄は1928年に東京美術学校を卒業後、樺太庁、日本発送電(株)、北海道電力(株)を経て、1960年に電建築設計事務所を設立した。栄の活動の特徴として、建築美の表現を意匠の主眼とした点、建築意匠は北海道電力期に顕著なモダニスタイルを中心としながら、西欧の建築様式を折衷した卒業制作、豊原武徳殿や正教寺鐘樓の和風意匠など、多様であった点を指摘した。

第5章では岡田鴻記(1907～1981)の経歴と建築活動を示した。岡田は1928年に神戸高等工業学校を卒業後、北海道帝国大学営繕課を経て、戦中から戦後にかけて北海道赤平町平岸地区を本拠とした後、北海道開発大博覧会の受注を期に、1950年に岡田設計事務所を設立した。岡田の戦前の特徴として、北海道帝国大学の施設のみならず、住宅をはじめとする民間施設を設計していた点を示した。戦後は鉄筋コンクリート造の寺院建築に力を注いだ点、1960年代以降は主に後進の育成と経営を行い、設計件数が急増した点を指摘した。

第6章では吉田三郎平(1908～1975)の経歴と建築活動を示した。吉田は1934年に早稲田大学を卒業後、北海道庁、北海道土木工業組合を経て、1950年土建工房を設立、1960年吉田建築設計事務所へ改組した。吉田の活動の特徴として、自動車関連施設の設計が多い点、件数こそ少ないものの寺社建築の和風意匠に力を注いだ点を指摘した。

第7章では橋本理助(1908～1986)の経歴と建築活動を示した。山形県に生まれた橋本は、東京市役所に勤務しながら日本大学高等工学校で教育を受けた後、北海道庁土木部建築課、戦災復興院を経て、1954年に橋本理助建築研究所を設立した。橋本は従来、札幌グランドホテルをはじめとする、戦前の北海道における鉄筋コンクリート構造の専門家として知られていたが、特に戦後、意匠設計を行っていた活動の様子を示した。

第8章では岩見田良夫(1910～2005)の経歴と建築活動を示した。岩見田は1932年に札幌工業学校を卒業後、小樽市建築課、帝国産金(株)、北海道住宅(株)、昭和通商(株)を経て、1951年に岩見田建築設計事務所を設立した。岩見田の活動の特徴として、帝国産金時代の人脈による遠軽周辺での設計、浦河の実業家との交友による日高支庁での設計が多かった点を指摘した。

結章では総合考察として、6名全体の経歴と建築活動の傾向を示した。経歴の傾向は3点あり、1) 建築の高等教育あるいは中等教育を受けた、2) 教育を受けた後、官庁営繕組織またはそれに準じる組織に所属した、3) 設計事務所設立の経緯は、所属組織を辞して設計事務所を設立した、戦中から戦後の社会的混乱の中で生計を立てるために設計事務所を設立した、という2点に大別されることを指摘した。建築活動の傾向については、年次別件数、所在地別件数、構造別件数、建築種別ごとの件数、の4点より分析を行った。特に建築種別ごとの件数に関して、公共施設、特に学校が一定の割合を占める、各人の人脈を生かした件数の多い特定の建築種別が存在する、件数は少ないものの各人が特に力を注いだ建築種別が存在する、という3点の傾向を挙げることができる。

最後に、戦後1950年代から1970年代の北海道建築界において、6名は本州を本拠とする設計事務所・総合請負業設計部が進出する中で、自らの経験を生かし意欲的に建築設計を行っていた点、北海道における建築設計関連団体の活動の中心にあり、自営建築家を含めた建築設計者同士の連係に尽力した点から、6名は主に1950年代から1970年代にかけて、建築設計業の定着に寄与した建築家であることを示した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 角 幸 博

副 査 教 授 森 傑

副 査 准教授 小 澤 丈 夫

学 位 論 文 題 名

北海道における旧日本建築家協会所属の 建築家に関する研究

我が国における建築家研究は、これまで首都圏や関西圏の都市を本拠とした人物を中心に行われてきた。近年、地方都市を本拠とした建築家研究は散見されるが、依然として研究蓄積は少ない状況である。本論文は、戦後 1950 年代から 1960 年代にかけて北海道の都市を本拠として活動した建築家から、旧日本建築家協会に所属し、自ら設計事務所を設立した 6 名―田上義也、栄米治、岡田鴻記、吉田三郎平、橋本理助、岩見田良夫―を対象にその経歴と活動を通じて、同世代 6 名の活動の比較と北海道戦後建築史における位置づけを試みている。

論文は序章以下、9 章で構成され、序章では研究の目的、方法のほか、我が国における建築家研究の動向と、地方都市を本拠とした建築家の経歴と活動について概観している。第 1 章では、建築設計関連団体の概要と、旧日本建築家協会北海道支部の設立について概説し、初期に在籍した 13 名の中で、対象の建築家 6 名が旧家協会北海道支部のほか北海道建築設計監理協会や北海道建築士事務所協会でも中心的役割を果たした点を明らかにしている。第 2 章では、1920 年代から 1970 年代にかけての北海道建築界の建築設計組織と設計者を中心に通観し、6 名の建築家達の活動背景についてふれている。

以下、第 3 章から第 8 章にかけて 6 名の経歴と建築活動を示している。第 3 章では田上義也(1899～1991)の経歴と戦後の活動について論述している。特徴的な作品として、ユースホテル群を挙げ、ユースホテル運動の理念と、田上の設計姿勢とを具現した意匠であることを明らかにした。さらに主要な作品群である北海道銀行施設の設計では、北海道銀行初代頭取島本融との人脈が多産な活動の原動力となった点を指摘している。

第 4 章では栄米治(1904～1976)の経歴と建築活動を示し、西欧の建築様式を折衷した東京美術学校の卒業制作をスタートに、建築美の表現を意匠の主眼としたこと、北海道電力勤務期の顕著なモダン意匠を特徴としながら、豊原武徳殿や正教寺鐘樓の和風意匠など多様な意匠展開を指摘した。

第 5 章では岡田鴻記(1907～1981)が、神戸高等工業学校卒業後、北海道帝国大学営繕課を経て、岡田設計事務所設立までの経緯、さらに戦前・戦後を通じての広範な建築種別、和風からアール・デコ風までと多様な意匠展開、鉄筋コンクリート造を中心に、鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造、木造と広範に構造を採用した点を指摘している。

第 6 章では吉田三郎平(1908～1975)が、早稲田大学卒業後、北海道庁、北海道土木工業組合を経て、吉田建築設計事務所設立を背景に、公共建築を中心としながらも、寺社仏閣の和風意匠に力を注いだことを指摘した。

第 7 章では橋本理助(1908～1986)の経歴と建築活動を示し、山形県生まれの橋本が日本大学専攻部を卒業後、北海道庁土木部建築課、戦災復興院を経て、橋本理助建築研究所を設立したこと。札幌グランドホテルをはじめとする、戦前の北海道における鉄筋コンクリート構造の専門家として

知られていたが、戦後には意匠設計を展開した点を明らかにした。

第8章は岩見田良夫(1910～2005)が、札幌工業学校を卒業後、小樽市建築課、帝国産金などを経て、1951年に岩見田建築設計事務所を設立したこと。堅実な作品の多い中で、帝国産金時代の人脈による遠軽周辺での設計や浦河の実業家との交友による日高での設計が特徴的である点も指摘した。

結章は総合考察で、6名の経歴と活動の傾向を比較検討し、経歴では、高等教育あるいは中等教育を受けた後、官庁営繕組織あるいはそれに準ずる組織での実務を経て、組織の中核を担った後、戦後に独立し設計事務所を設立する、という共通の過程を指摘している。さらに独立後の設計件数が戦前の自営建築家に比して大幅に増加していること、構造は戦前の経験を生かし、鉄筋コンクリート造が中心であること、学校や役場庁舎などの公共施設のほか、個々人の人脈や組織に特化した建築種別がみられることなどを指摘し、6名は1950年代から1970年代の北海道建築界において、戦前の経験を生かし意欲的に建築設計を展開していったこと、および彼らが旧日本建築家協会北海道支部や北海道建築士事務所協会、北海道建築設計監理協会などの建築設計関連団体の主導者として、また建築設計者同士の連係に尽力した点から、戦後初期の建築設計業の定着に寄与した建築家達であったと結論づけている。

これを要するに、著者は、1950年代から70年代の北海道建築界における6名の建築家の詳細な経歴と活動および建築設計関連団体の主導者としての位置づけを通して、戦後建築史研究に新たな知見を提示したものであり、建築史学、建築意匠学、建築都市学に貢献するところ大なるものがある。

よって著者は、北海道大学博士(工学)の学位を授与される資格あるものと認める。